



i-Reporter

導入事例

広大な造船工場でi-Reporterが活躍！
業務効率UPとコスト削減に繋がった事例

(株式会社名村造船所)

広大な造船工場でi-Reporterが活躍！ 業務効率UPとコスト削減に繋がった事例

株式会社名村造船所は1911年、大阪で小さな造船所として創業。世界中で走る船舶を建造する事業を大きな柱として、顧客、従業員、地域社会にとって欠かせない存在になりたいという思いをこめて「存在感」という企業理念を掲げている。

名村造船所は他の造船所と比べても多種多様な船舶を建造できる点が強みで、小型から積載重量3万トン程度のものから、上は30万トンまで建造。最近ではLPG船や次世代燃料船も手掛けるほか、橋梁などの鉄骨製作にも携わっている。これらの事業を運用するため巨大な工場を稼働する同社では積極的に情報システムを導入しており、i-Reporterを活用することで業務効率の向上とコスト削減を実現している。



株式会社名村造船所（船舶・各種鉄構造物製造）



株式会社 名村造船所
NAMURA SHIPBUILDING CO.,LTD.

USER'S VOICE



WIN21 推進部長
西洋一郎氏

弊社には、約70万平方メートルという広大な敷地面積がある工場もあります。鋼板の切断から建造まで一直線に流れる非常に生産性の高いレイアウトで工場を運営していますが、このような大きな工場を動かすために昔から情報システムを活用してきました。

最近でも「人と設備と製品をデジタルデータで繋いでいく」ことを念頭に、スマートファクトリー化に取り組んでいます。このような先進的な内容に積極的に取り組んでいこうという姿勢が当社の強みであり、今後に向けての大きな展開になるのではと考えています。

INTERVIEW

YouTubeでインタビュー動画を公開中！実際の活用事例や効果について教えていただきました。



リアルタイムにチェックができるので

NEXT

**i-Reporterでコストを年間約80万円削減！
スマートファクトリー化の実現を目指す**

抱えていた課題・導入後の効果・今後の展望...詳細は次ページへ ▶

効果

導入前

ガス漏れ状況を担当部門に連絡する際
写真撮影や手書きメモなどで
手間と時間がかかる

紙帳票の報告内容と撮影した写真が
分断され、情報が繋がらない

1枚の報告書につき、
1枚の写真だけで報告をしている

紙での回覧物により
製造部門と設計部門の間で
情報共有にタイムラグが生じる

i-Reporter
導入後

作業時間が1日あたり約1時間短縮！
年間で約80万円コスト削減

状況記録と写真添付を同時に行えて
現場情報が伝わりやすくなった

複数の写真を添付できるようになり
伝えられる情報量が大幅に増加

どこで回覧が止まっているか
すぐにわかりフォローしやすくなった



生産革新課長
酒井 徹氏

造船所では様々な流体を使用しています。ホースが劣化・損傷することで発生するガス漏れはお金を大気中に放出しているも同然なので、これを抑制することが非常に大切。そのために地道なパトロールを行うのですが、従来は写真を撮って手書きでメモを取るというやり方で非常に手間がかかっていました。

この作業をi-Reporterで置き換えることで、1日あたり約1時間の作業時間短縮、年間約80万円弱のコスト削減効果が生まれました。

現場の声

すべて紙帳票に記録して写真を撮り、帳票はPDFにして写真はメールで送る…というやり方でガス漏れや不具合を報告していました。ですが、それでは情報が紐づかないことも。

i-Reporterの導入により**その場で写真と帳票を紐づけて、情報を分かりやすく伝えられる**ようになりました。



玄海テック 名村事業所
設備 2S 組長
杉山 祐介氏

現場の声

これまではデータを取得して、収集して、整理して、配信して…という多くのステップが必要だったのが、**データをアップロードするだけですぐに整理して共有されるので、スピード感が飛躍的に向上**。パトロール後の指摘から対応までにかかる時間が短縮されたのは大きなメリットです。



工場管理部
設備管理グループ
下野 貴之氏

現場の声

進水チェックリストや設計の改善要求レポート、議事録などの様々な帳票作成にi-Reporterを利用しています。

以前は現場でメモを取り、事務所に戻ってからパソコンで作業をしていましたが今は**現場でのタブレット操作で作業が完了**。より迅速な現場対応が可能になりました。



船殻部 内業課
組立3係スタッフ
松尾 太郎氏

i-Reporter導入の経緯と今後の展望

最終目標はスマートファクトリーの実現。

i-Reporterはアナログからデジタルへの変革の第一歩に最適。

生産革新課長 酒井 徹氏

社内のスマートファクトリー化によって生産性をさらに高めることを目的に「生産革新課」は発足しました。業務の効率化を進めるために現場管理者や関係者にヒアリングしたところ、顕著に挙がったのが「紙の帳票が多い」という声。スマートファクトリーを目指す上で、情報を電子化していく、つまりデジタイゼーション/デジタライゼーションが不可欠との認識から様々なソフトウェアの検討を進めていた中で、i-Reporterが最適な選択肢であると結論づけました。

導入初期には新しいシステムに対する現場の抵抗感も見られましたが、「紙がそのままデジタルに変わるだけ」と説明し不安感の軽減に努め、関係者支援のもと1~2週間程度で適応しました。新しいシステムの運用を定着させるため利用者のフィードバックも重要し、**小さな変更でも速やかに対応するよう心がけています**。その結果、利用者から「すごく助かった」との声が寄せられ好循環が形成されていきます。

最終目標はスマートファクトリーの実現です。アナログからデジタルへの変革の第一歩としてi-Reporterは非常に使いやすく、始めやすいと考えています。まずはi-Reporterを全社で普及させ、社内での脱アナログを進め「見える化」「予防保全」「デジタルツイン」などへと展開していく予定です。

